

米国人はスペイン語を学んでは

なんののかんと言いながら、日本人の間に英語がずいぶん入りこんできた。小学5年生から英語が必修となり、2020年度からは3年生からになるという。英語ができる子どもが増えるのは一歩前進だが、小学校の先生にとっては教え方はわからず、学校ごとの比較もできず、悩みは尽きない。

しかし、英語を母国語とする人たち（主に英国と米国）は私たちにはわからない別の悩みを抱えている。「外国語ができなくても困らないから、やる気にならない」というぜいたくな悩みだ。

1990年代と2000年代の2度の米国駐在を経験し、そんな印象をもった。多少の謙遜はあっても、米国人は英語以外は「苦手」と言う人が多い。外交官や学者、ビジネスマンなど目的がはっきりしている人は外国語に熱心だが、一般人はそうではない。

それはそうだろう。もしも外国人が全員日本語がわかれば、日本人は外国語を習う必要はないし、仮に勉強しても使わないからそのうち忘れてしまう。そんなふうにと考えると、英語圏の人たちが外国語を習得するには相当な覚悟と努力がいる。

ただ、米国人にとって1つだけ覚えやすい外国語がある。スペイン語である。米国人は日常的にこの言葉を耳にするし、周りにスペイン語で会話するラティーノ（中南米系住民。ヒスパニックと呼ぶ人もいる）がわんさといふからだ。小中学校の子どもたちにはかなり

スペイン語が浸透しているという。

最近の英国の調査を見て「やっぱり」と思った。その調査主体は「インターネットの発展で英語が世界語になったことによって、（英米人は）語学にかかる時間も努力も十分でなかった」と報告している。

ブリティッシュ・カウンシルという英国の立派な国際文化交流機関の調査だから、いいかげんとは思えない。それによると「自分たちにとって大切な外国語」の第1位はスペイン語だった。以下アラビア語、フランス語、中国語、ドイツ語、ポルトガル語と続いて、日本語は10位だった。

そこで出てきたのが、米国の公用語を英語とスペイン語の2つにしてはどうか、というアイデアだ。米国では中南米系住民が急増しているので、いずれスペイン語が当たり前前の言語になる。白人や黒人たちもスペイン語ができないと困る時期がくる。

確かに、米国のスペイン語人口は急増しており、いわゆるラティーノは4500万人と総人口約3億人の約15%に達したとみられている。すでに21世紀初頭に黒人の人口を上回っており、マイノリティーの最大勢力だ。

今後の増え方を予測するには若年層の数を調べればいい。たとえば18歳以下のラティーノ比率がロサンゼルスでは50%以上、マイアミは40%、ヒューストンは36%といった具合だ。彼らはみんな英語とスペイン語のバイリンガルだ。

ニューヨークやロサンゼルスのホテルに泊まると、3K（きつい、汚い、危険）を引き受けているのはラティーノだとわかる。彼らにスペイン語で話しかけようものなら、とたんにべらべらまくし立て、英語は瞬時にどこかへ吹っ飛んでいる。

歴史をちょっと眺めるだけで、なぜ米国にスペイン語が広がったかがわかる。その昔、米国はスペイン語民族であるメキシコに相当部分支配されていた。1848年に終わった米墨戦争後、戦勝国の米国がメキシコの領土の3分の1余りを奪い、今に至っている。

だからこそ西海岸にはスペイン語の都市名が数多く残る。ロサンゼルス、サンフランシスコ、サンノゼ、サンタクララ、サンタフェ、ラスベガスなどはみんなメキシコ領だった。

日本にくる大リーグの野球選手も英語よりもスペイン語のほうが得意な人が多い。大リーグは米国だから、選手は英語で会話していると思ったら大間違い。ロッカールームでスペイン語でダベる選手は数多い。彼らはベネズエラ、ドミニカ、キューバ、メキシコ、パナマなどの出身だ。

英語を除くと、世界で最も言語人口が多いのは中国語で、次は5億人のスペイン語だ。もう冗談ではなくなってきた。米国のスペイン語化は荒唐無稽などではない。

蛇足をひと言。スペイン語ができればほかのラテン系言語も理解しやすくなる。本当です。 ●

“太平洋砂漠”が生んだ奇跡

ペルーの太平洋岸に荒涼とした砂漠が広がっていることはあまり知られていない。首都リマもオアシスに栄えた都市だし、有名なナスカの地上絵も砂漠の中にある。その地上絵地帯を車で突っ切ったことがある。もちろん地上絵を壊そうとしたわけではなく、舗装道路を走っただけだ。空からではなく「地上の地上絵」がどうなっているかを見たかったのだ。

でも期待は裏切られる。「えっ、これが地上絵の線?」。思わず叫んだことを覚えている。深さ数センチ程度の浅い溝が足元にある。ひと風吹けば砂に埋もれてしまいそんな頼りなさだ。そんな溝が2000年もの間、線を保ち、猿や鳥を形づくっていたのが不思議でならない。ガイドは「風も雨もないからね」と説明していた。このあたりで紀元前のミイラが見つかったりするの砂漠に守られたからだ。

ペルーの南に位置するチリ。南北4600キロメートルのヘビのような細長い領土をもつ。その最北部に干からびた砂漠がある。その名は「アタカマ砂漠」。5000~6000メートル級の山々がそびえ立つアンデス山脈の太平洋側にある。

ここの気候はナスカよりはるかに乾いていて、「世界で最も乾燥し、風も少ない地域」といわれる。NHKが「地球イチバン」という特集番組で砂漠の真ん中の「40年間雨が降らない村」を紹介したこともある。

奇跡のような不思議な気候を生み出せる理由はこうだ。

南米の太平洋岸には赤道近くでも寒流が流れている。この大きな海流は古来ほとんど変わらない。このため熱帯でありながら、日差しが強くても気温は上がらない。海面温度が上がらなければ、海水が蒸発せず雨雲ができない。

一方で反対側（東側）のブラジル・アマゾン地域の湿った空気はアンデス山脈でさえぎられる。だからアンデスの太平洋側は雨が降らず、ますます乾燥する。その稀有な気候条件のもと、類例のない乾燥地帯が出来上がった。おかげでこの砂漠が世界的に注目される“パワースポット”になろうとしている。

チリの砂漠は今、天文学ブームに沸いている。最も熱心なのは東京大学で、「アタカマ・TAOプロジェクト」を推進する。宇宙からの微弱な光を通して銀河や惑星の誕生を解明しようというもので、「宇宙の起源」を探る壮大な事業といってもよい。

赤茶けたアタカマ砂漠にあるチャナントール山（標高5640メートル）の山頂に口径6.5メートルの大型赤外線望遠鏡TAOを建設する。赤外線は水蒸気と二酸化炭素に吸収されやすいから、観測には乾燥地域がいちばん適しているといわれる。1999年に計画をスタート、2009年にTAOの小型版である口径1.0メートルの「ミニTAO」を稼働させた。

日本が関係するもうひとつの天文学プロジェクトは国立天文台が主導する「ALMA国際電波望遠

鏡プロジェクト」だ。TAOと同じアタカマ砂漠に望遠鏡66基を円形に据え付け、「66基合わせて巨大な1基」として機能させる国際共同事業だ。すでに「日本分」の機器据え付けは終わった。

南米の太平洋岸の山岳地帯は「塩湖」でも有名になった。塩湖は海の隆起で山岳地帯に塩分が蓄積したもので、大量のリチウムが埋蔵する。リチウムはハイブリッド（HV）車の蓄電池用として需要が急拡大しており、今後10年で2倍に増えるとの見通しもある。

アンデス山系の乾燥した高地にはアルゼンチン領のオラロス塩湖もある。この塩湖のリチウムに目をつけて、豊田通商は現地企業に出資、開発許可を取得した。また、ボリビアにはウユニ塩湖もあり、日中韓などの政府、企業が参画を狙っている。

ウユニ塩湖はアタカマ砂漠と違って雨が降るので、雨季には鏡のような絶景をつくりだす。観光客はリチウムではなく、この景色をめがけて殺到する。

「天文学と塩湖」という珍しい取り合わせで、アンデス山脈の太平洋岸が脚光を浴びている。リチウム生産が思惑通りいけば、中南米経済を浮上させる可能性を秘める。

砂漠なんて無用の長物だと思っ
ていても、アラブやゴビ砂漠の石油と同じように、いつ利益源に変身するかわからない。

（日本ブラジル中央協会
常務理事 和田 昌親）